和歌山県地球温暖化対策情報誌

わおん通信

2022 冬号 vol.47

特集

3年ぶりに笑顔が集う

おもしろ環境まつり2022

CONTENTS

P2－P3
「弁慶」生誕の地でゼロカーボン
森の安全を高める
人権イベントで「環境」を伝える
高レベル放射性廃棄物の中間貯蔵施設を研修

P3 推進員ノブくんの
ああしたら、こうなった④

P4－P5
3年ぶりに笑顔が集う
おもしろ環境まつり2022

P6 県情報

P7 推進員さん訪問記㊶

P8 INFORMATION

「弁慶」生誕の地でゼロカーボン

2022年10月1日
扇ヶ浜海水浴場＠田辺市

［エコネット紀南・和歌山県センター］

9月30日と10月1日、弁慶まつりが3年ぶりに開催されました。今年で34回目となる本イベントですが、田辺市扇ヶ浜会場をメイン会場として、地域の特産品の販売や観光協会のPRフリーマーケットなど約20のブースが出展されました。今回は、久しぶりの開催ということも相まって、集まった人々が楽しそうにイベントに参加していました。エコネット紀南と和歌山県センターは共同で出展し、「おうちの〝ゼロカーボン〟チェックコーナー」として家庭での15の取組に関するアンケートを実施しました。特設ステージで行われていた「よさこい踊り」に出演するメンバーらが出番の前後に大勢訪れ、華やかな衣装に身を包んだ姿で、アンケートの設問を読み、時折仲間と内容確認をしながら、一人ひとり真剣な表情で回答していました。アンケート回答後に話を伺うと、「普段の生活でCO_2削減にどれくらい意識できているかを見直すきっかけを与えてくれた。」とコメントがありました。ここ数年は、現地で行われるイベントが少なく、地球温暖化に関して啓発する機会が少なくなっていただけに、参加者と対面しながら啓発することで、確かな手応えを感じることができた1日でした。

森の安全を高める

2022年11月6日
稲原地区＠印南町
森づくり活動の安全講習会

［木の国協議会］

11月6日、印南町稲原で、森林や里山の整備に関する安全講習会が行われました。適切な森林整備や計画的な森林資源の利用を促す目的で、地域住民等による森林の手入れ等の活動支援を行う、林野庁の「森林・山村多面的機能発揮交付金」を活用したもので、木の国協議会（事務局：NPO法人わかやま環境ネットワーク）が和歌山県内の活動団体を支援しています。

今回の講習会は、活動中に起こりがちな怪我やアクシデントを防ぐことを目的としており、県内の活動団体から12名が参加しました。講師の大谷栄徳さんは、林業事業所のスタッフとして数々の現場を経験し、樹木医としても活躍しています。講習会では、自身がこれまでに学んできた内容を中心に丁寧に説明しました。また、チェーンソーや草刈機を持つときの姿勢や身体の動きなど「なぜその動きが必要か」を実演しながら伝え、説明を受けた参加者は、実際に機器を持ちながら体感しました。午後からは座学に切り替え、木の成長を見極めたうえで、どのような伐採計画が必要かをワーク形式で学びました。

参加者からは、「ついやってしまいがちな体勢が危険であることを再認識した。」「森づくりは全体バランスと将来の山の姿をどうイメージするかが肝心だと理解した。」などのコメントがありました。

県土全体の約77％の面積を占める森林は、気候変動対策としてその活用が期待されていますが、全国的に林業の不振、山村地域の過疎化・高齢化により森林の手入れを行う地域住民が減少しています。地域の森林を整備する本交付金の次年度募集が開始されています。詳しくは木の国協議会ホームページまで。

人権イベントで「環境」を伝える

2022年11月19日
和歌山ビッグホエール＠和歌山市

［和歌山県センター＆環境生活総務課］

11月19日、公益財団法人和歌山県人権啓発センター主催の「ふれあい人権フェスタ2022」が和歌山ビッグホエールで開催されました。

イベントには、医療や福祉から環境まで、幅広い分野で活動する団体が集い、今回は91団体が出展し、約3,500人が参加しました。今年も和歌山県センターと県環境生活総務課が共同で出展し、ゼロカーボンのアンケートのほか、環境活動に関する動画を流しました。毎年行っているアンケートでは、今期最高の回答数が得られ、環境に対する関心の高まりを感じられる結果となりました。

ステージ発表や各ブースでの取組を見ながら、複雑化・多様化する人権問題を理解する機会になり、環境と人権がどのように関係しているのか、会場での関わりの中で繋がりを実感することができました。

高レベル放射性廃棄物の中間貯蔵施設を研修

2022年11月4日
原子燃料サイクル関連施設（青森県六ヶ所村）

［伊都・橋本地球温暖化対策協議会］

エネルギーの安定供給確保に向け、原子力発電所の運転期間の延長や、次世代原子力発電所の開発や建設が国内で議論されています。そんな中、原子力発電で大きな課題となっている高レベル放射性廃棄物の地層処分についての理解を深めるため、原子力発電環境整備機構（以下：NUMO）の支援を受け、青森県六ヶ所村にある「原子燃料サイクル関連施設」の見学会を行いました。見学会には、各地域で地球温暖化防止の啓発活動を行う協議会のメンバー等10名が参加しました。

初日は、地層処分を推進するNUMOの社員を講師として、地層処分についての勉強会を行いました。地層処分とは、地下深くの岩盤が持っている「物質を閉じ込める力」を利用し、閉じ込めをより確実にするための人工バリアを施したうえで、地下深部の安定した岩盤に高レベル放射性廃棄物などを埋設し、人間の生活環境に影響を及ぼさないように長期にわたって閉じ込める方法です。地下深部には、「人間の生活環境から隔離できる」「物質が移動しにくい」「物質が変化しにくい」といった特徴があるため、物質を長期にわたり安定して閉じ込めるのに適した場所なのだそうです。勉強会では、「臨界は起きないのか。」「コンクリートで遮断できるのか。」「地下水は大丈夫なのか。」等様々な質問が出され、NUMOの担当者から丁寧な説明を受けました。

翌日は、日本原燃株式会社が運営する低レベル放射性廃棄物埋設センター、高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター、建設が開始された再処理工場等を見学しました。これらは皆、エネルギー自給率の低い日本における早期の原子燃料サイクルの確立を目指して作られた研究施設で、最先端技術が集められています。本研修の受講者からは、「地層処分は今の技術では最高レベルの処分方法だ。」「十分な研究と検討がされている。」「原子力発電への危険性の不安が残った。」等の様々な意見が出されました。

今後、多くの国民が原子力発電に関心をもち、日本の課題を解決していこうとする議論が深まればと考えています。

（推進員　黒井成男）

推進員ノブくんの ああしたら、こうなった ④

タネと気候変動

私は、育てた野菜を一部収穫せずに畑に残し、タネを採っています。毎年タネを採り、次の年にその種から苗を育てることを繰り返すことで、うちの畑の環境に適応していくだろうと考えてのことです。実際、タネ取りを続けている野菜は年々作りやすくなっているように思います。

あなたは、売られている野菜のタネのパッケージを読んだことはありますか。原産国の欄には、アメリカ、イタリア、ニュージーランドなど様々な国名が見られます。日常的に私達が食べる野菜のタネであっても、その多くが海外から輸入されていて、日本で生産さているタネは、とても数が少ないことがわかります。かつては地域ごとに栽培者自身や採種農家によってタネは生産されていました。私の曽祖父も野菜のタネを採り、販売もしていたそうです。土地ごとに、数多存在した固定種や在来種ですが、今ではその多くが失われてしまい、地域の野菜を守る取組がニュースになっています。気候や風土は地域によって違います。更に言えば同じ畑の中でも場所によって環境は違います、その環境の数だけ品種が存在してもいいはずです。

しかし、ここにきて思うことは、産業革命以降の気候変動を、植物の適応力だけで乗り越えられるのか、ということです。畑をするようになってから、猛暑や大型台風、少雨などの極端な気象が増えていることをよく感じます。気象条件に左右されず、安定して農業生産を行うには、ハウスや室内で環境制御を行う方法が考えられますが、気候から切り離された農業は、同じように文化や生活からも切り離されてしまいます。五穀豊穣の神様に、雨や日照の代わりに原油価格の安定を祈るには、一体何をお供えすればいいんでしょうか。

※種苗法により、自家採種が禁止されている品種がありますので、ご注意ください。

特集　３年ぶりに笑顔が集う　おもしろ環境まつり2022

今回で７回目となる「おもしろ環境まつり2022」３年ぶりに来場者を迎えたリアル開催の様子をレポートします。

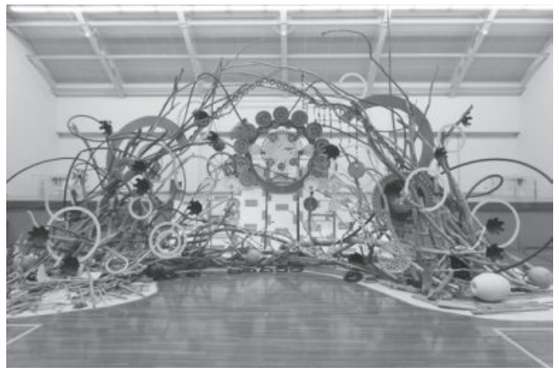
３年ぶりのリアル開催

12月３日、和歌山市立市民体育館でおもしろ環境まつりが開催されました。今回は入場制限を行ったうえで、３年ぶりに現地開催となりました。最大500人の来場者を設定し、事前予約での参加を募りました。一昨年、昨年とオンライン開催のみでしたので、果たしてどのくらい集まるか不安でしたが、事前登録制のチケットは全て予約で埋まり、当日は、多くの方が滞在する盛況ぶりでした。

「気候」「エネルギー」「生き物」「３Ｒ」「食べものと水」「防災」の６つのテーマに沿った27ブースの出展がありました。それぞれ工夫を凝らした出しものに子供だけでなく、大人も興味津々でした。特に、川の生物探しや丸太切りなどのブースが人気で、楽しみながら、頭と身体を使って学んでいました。

丸太切りに挑戦！

圧巻のメインステージ



メインステージの廃品利用のオブジェ

ゆったりとした空間で楽しむ人々

イベントの総合司会は、おもしろ環境まつりに欠かせない「和歌山のおばちゃん」こと桂枝曾丸さんと、昨年に続いて２回目となる佐々木春さんの二人が務め、まつりを盛り上げていきました。そして、会場のステージでは、今年も和歌山市出身のアーティスト、石田真也さん総指揮の元、海岸に流れ着いた漂着物を利用し、高さ約５m、幅10mの巨大なオブジェが組み上げられました。流木を立体的に組み上げてデザインされた自立式のオブジェは迫力満点で、受付を通過し体育館に足を踏み入れると眼の前に現れる巨大なオブジェに、「なにこれ！」「すごい！」と思わず声を上げる参加者もおり、普段見慣れている体育館からは想像できない不思議な空間に、大人も子供も圧倒されていました。

あの漫才師も

メインステージでは、和歌山市で注目度急上昇中の漫才ユニット「SDGs BOYs」も登場しました。今回はSDGsの９番目の目標である“産業と技術革新の基盤を作ろう”をテーマに、漫才が披露されました。大人でも説明するのが難しい内容ですが、漫才のネタとしておもしろ可笑しく、そしてわかりやすく伝えていました。「SDGs」と「笑い」がコラボするユニークな彼らの名演は、おもしろ環境まつり公式サイトで絶賛公開中です。

わかやまこどもエコチャレンジ表彰式

毎年恒例の「わかやまエコチャレンジ」のレポート展示も行われました。わかやまこどもエコチャレンジは、県内の小学生が夏休み中に、家族と一緒に節電やごみ削減などに取り組んだ内容をレポートにまとめたもので、今年は94の小学校から3,741通の応募がありました。

今年度から優秀な作品が表彰されることとなり、厳正な審査の結果、最優秀賞１作品、優秀賞２作品、奨励賞５作品が選ばれ、メインステージで、その表彰式が行われました。式に出席した６名の受賞者は、少し緊張した面持ちで順に表彰状を受け取っていきました。授与式が終わり司会者からのインタビューを受け、「ごみをできるだけ減らすため、野菜くずで出汁をとった。」「近くの海岸でごみを拾って、その割合を調べると、プラスチックごみの割合がとても多かった。」「エコバックを使うなど、身近なことを続けていきたい。」など取組の内容や、抱負などが伝えられると、会場からは大きな拍手が送られました。審査員の一人でもある中島教授（和歌山大学システム工学部）からは、「受賞作品は、科学の目を通じて論理的にわかりやすくレポートが整理されていた。」「受賞が終わりではなく、これがスタートだと思って、これからも素晴らしい活動を続けてほしい。」などの総評がありました。

こどもエコ・チャレンジ表彰式の様子

会場には今年もエコチャレンジの全作品が展示され、自分の作品を探したり、他の作品をじっくりと眺めたりする親子の姿で賑わいました。

出展会場も充実

今回は、29団体が工夫を凝らした27のブースを出展しました。例えば、エネルギーについて楽しく学べるブースでは、訪れた子供たちが手回し発電機や、太陽光発電の実験などを通して電気をつくる仕組みを学んでいました。また、おさがりの子供服を交換できるブースや、資源ごみのサンプルを見ながら、回収されたものがどのようにリサイクルされるかを学ぶブースなどもありました。

じっくりと制作していきます

防災に関するブースでは、会場の市民体育館で実際に使用する段ボール製の簡易ベッドとパーテーションが組み立てられて避難の様子を実際に体感したり、防災士から防災グッズの用途や置き場所などについて説明を受けたりしました。

生き物についての説明を受ける子供たち

来場者の反応

おもしろ環境まつりでは毎年来場者アンケートを行っています。今回の感想として「色んなブースがあり、楽しみながら環境について学べた。」「ごみ問題や地球温暖化を身近に感じました。」「環境まつりに参加し、一言で環境といってもたくさんの方面から、人間一人ひとりが環境問題にアプローチする必要があると思いました。」「環境のために私個人でできることは少ないですが、出来ることからやってみようと意識を高めることができました。」といった感想がありました。出展者アンケートでも「一人ひとりと向き合って、伝えることができた。」といった感想が寄せられました。

会場の人数を制限する方法での開催でしたが、来場者も出展者も深い学びの機会になったとの声が多く、今後の開催に活かせるヒントが得られました。

引き続き オンライン配信も併催

今回もメインステージのプログラムを YouTube ライブにて配信を行いました。現在アーカイブ動画公開中です。「おもしろ環境まつり」で検索し、ぜひチャンネル登録をよろしくお願いします。

プラスチックごみ削減にご協力ください！

今や私たちの生活に欠かせないプラスチック製品ですが、みだりに捨てられて散乱し、海に流れ着くことによって、海の環境や生物に影響を与える「海洋プラスチックごみ」が世界的な問題となっています。

この問題を解決するために、和歌山県循環型社会推進課では、県民、事業者、行政が一体となってプラスチックごみ削減に取り組む「わかやまプラスチックごみ削減県民運動」を推進しています。

プラスチックごみ削減協力事業者制度

プラスチックごみ削減のための具体的な取組を実践する事業所等を登録し、その取組を広く発信する制度を実施しています。

◇登録対象

県内の事業所、団体等のうち、以下の取組項目の中から１つ以上を実践する事業所等

①プラスチック製品の削減

（例）レジ袋の削減、プラスチック製ストロー等の無償提供見直し　等

②プラスチックリサイクルの推進

（例）プラスチックごみの分別と適正処理　等

③代替素材の活用

（例）代替素材（バイオプラスチック等）を使用した製品の製造、販売、使用　等

④その他の取組

（例）地域の清掃活動に参加する　等

◇登録方法

申請書を和歌山県循環型社会推進課まで提出してください。

◇登録すると

県HP等で「プラスチックごみ削減協力事業者」として紹介し、登録証及びステッカーを交付します。

詳細は、和歌山県循環型社会推進課のHPをご覧ください

https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/031800/index.html

◆実施報告◆　友ヶ島クリーンアップ大作戦

海洋プラスチックごみ問題について理解を深めるとともに、環境保全に対する意識を高めるため、友ヶ島でイベントを実施しました。

当日は、大学生14名が参加し、海洋ごみ専門家のレクチャーを受けながら、友ヶ島の孝助松海岸、池尻浜海岸を清掃しました。海岸での清掃活動を通じて、海洋プラスチックごみ問題の現状を知るとともに、グループワークにより参加者間での交流を図ることができました。また、参加者は、観光ガイドの案内で友ヶ島灯台や第二砲台跡を見学しました。

実施日：令和４年10月30日（日）
主催：和歌山県
協力：和歌山市、和歌山海上保安部、
　　株式会社オークワ

推進員さん ひょっこり 訪問記 41

橋本市　竹野　和花子 さん

18期生の竹野さんは、３姉妹の長女として大阪市に生まれました。小中学時代を埼玉県で過ごし、高校進学後に橋本市に移住しました。とても負けず嫌いな性格だったこともあり、徒競走などで１位が狙えそうにない時は、わざと足の遅い友達と一緒にゴールするような学生だったそうです。そんな竹野さんは、「育った家庭が、『上手な暮らし方』を日常的に実践していた。」と当時を振り返りました。捨てられるような袋をごみ入れとして活用したり、お風呂の残り湯を洗濯に使ったりすることが、当たり前に行われていたそうです。

社会人となり、結婚し、子供が生まれてからは、暮らしの中の工夫を更に追求するようになりました。子供の食べ残しをもったいないと思って引き受けたり、飲み終わった牛乳パックを開いてまな板がわりに使ったりと、思いついたアイデアをどんどん実践していきました。そんな暮らしを続けていた竹野さんですが、家族で様々な変化が起こり、次第に膨らんできた違和感に対してどう向き合えば良いのか、分からなくなっていったそうです。生きづらさを抱えつつ「このままではいけない」という思いが強くなってきた時に、同じような考えの人たちと繋がっていき、地球環境が置かれている危うさを知るようになりました。

県内で推進員活動をしている方が発信したSNSの情報を得て、環境活動家のお話会に参加し、これまでに聞いたことのない内容に衝撃を受けた竹野さんは、地球温暖化防止のための活動のことを知り、参加したいと思うようになりました。「このことを一人でも多くの方に知ってもらいたい」と、再び環境活動家を橋本市に呼ぶために、チラシ作りや会場の準備を行なったりします。

竹野さんは「現在の地球が置かれている状況を知った以上、これからもたくさんの人と一緒に、自分にできることを続けていきたいです。そのためには、自分自身もさらに多くのことを学び、感じたことを人に伝えられるようになりたいです。」と晴れやかな表情で話してくれました。

イベント情報

新サイトできました

わかやま脱炭素ポータル

事業所向けのエネルギー対策、環境対策に関する、和歌山県内の事例を中心に順次紹介
家庭部門も併設予定

公式WEBサイト　https://wenet.info/zc/

里山整備活動への助成制度・令和５年度募集

～「森林・山村多面的機能発揮対策交付金」の募集をします～

住民のみなさんがグループで森林資源の活用や里山環境の改善を目的に活動することにより、よりよい地域づくりを支援する林野庁の助成制度です。

実施主体：木の国協議会
助成期間：令和５年度（１年間）
助成の対象となる活動：
　里山・竹林の整備、山菜・きのこ・紀州備長炭の原木、木質バイオマスなど森林の様々な資源の活用のための活動で、３年以上継続して実施する活動
申請書の提出の〆切：
　第１回目 4月 10 日（月）採択決定 5月下旬
　第２回目 6月 12 日（月）採択決定 7月下旬
　詳細、申し込み書類等の様式については、ホームページに掲載
公式 WEB サイト：https：//kinokunik. net
お問い合わせ：
　木の国協議会（〒641-0014 和歌山市毛見 996-2 NPO 法人わかやま環境ネットワーク内 担当：大野）
　電話：073-499-4762

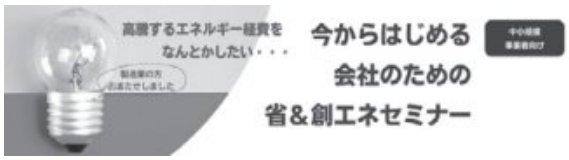
「未来の食卓」地産地消でエシカル消費

オーガニック料理教室開催しました！

日時：２月４日（土）10：00～12：00
場所：高野口地区公民館２階 調理室
　（住所／橋本市高野口町名倉 813-2）
定員：20 名　　参加費：1,000 円／人
持ち物：エプロン・マスク
申し込み、お問い合わせ：
　伊都・橋本地球温暖化対策協議会（担当：黒井）
TEL：090-1138-8388 FAX：0736-22-8388
E-mail：kurois603@yahoo.co.jp

・上記イベントは、本誌発行時点で終了しています。
・イベントの様子は次号以降に掲載予定です。

中小企業向け 省エネ&創エネセミナー開催



日時　2023年２月24日（金）13：30～ 16：00
　（13：00～受付開始）
場所　和歌山県民文化会館 ５階大会議室
　（和歌山市小松原通1-1）
参加費：無料　　定員：25社
詳しくは県センターまで

あなたの活動をサポート **わかやま推進員サイト**　わかやま 推進員　検索　イベント情報も随時更新

県センター通信

世界的な脱炭素の動きが、国内でも本格的にスタートしています。個人、企業、自治体、それぞれの立場で進めていく方法は異なりますが、最終的なゴールは一つです。和歌山県センターが新たに開設しました「わかやま脱炭素ポータル」では、和歌山県内の事例を中心に、さまざまな活動を紹介していきます。推進員として「何ができるか」を考えて行動していくためのヒントも掲載予定です。エネルギーの高騰や将来の懸念される話題が飛び交っている状況だからこそ、知恵と工夫を共有した推進員の活動がますます重要になっています。和歌山県センターは今後も温暖化防止活動を進めるため、引き続き一緒に歩んでいきます。

2022 冬号 vol.47

わおん通信

発行／和歌山県環境生活総務課
〒640-8585 和歌山市小松原通1-1
TEL：073-441-2674　FAX：073-433-3590
mail：e0317001@pref.wakayama.lg.jp

編集・お問い合わせ／和歌山県地球温暖化防止活動推進センター
〒641-0014 和歌山市毛見996-2
TEL：073-499-4734　FAX：073-499-4735
mail：wenet@vaw.ne.jp

PRINTED WITH SOY INK